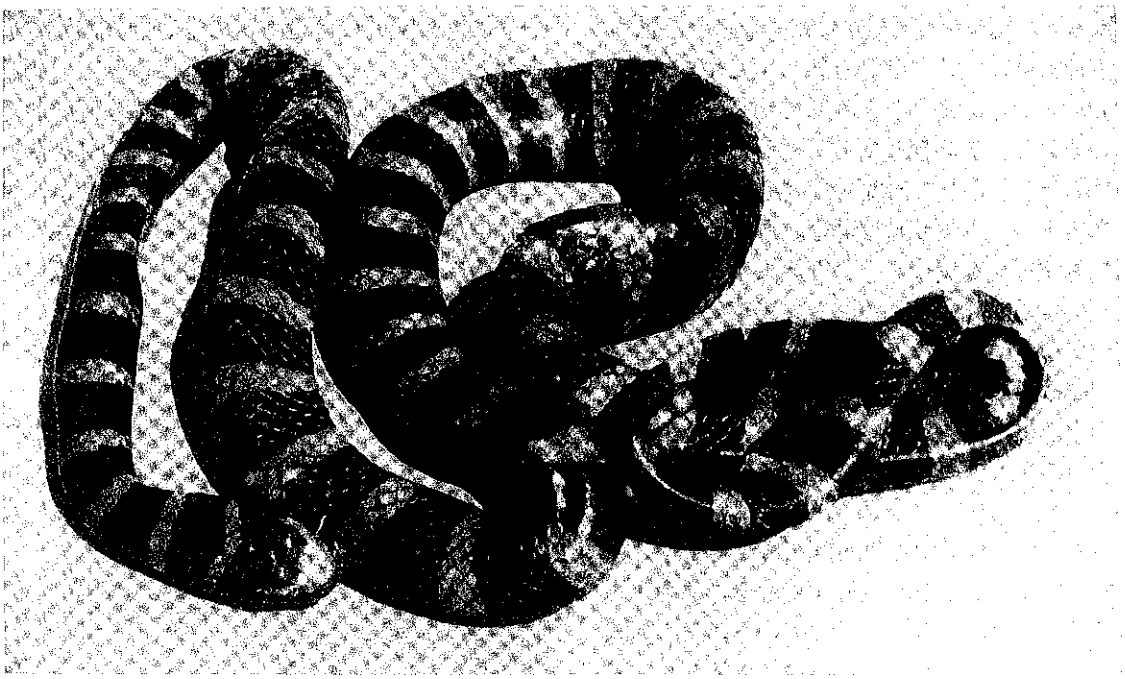
ISSN 1341-6928

串本海中公園
マリンパビリオン

1999. 7. Vol. 28, No. 7



ヒロオウミヘビ

Laticauda laticaudata (Linnaeus)

南西諸島の沿岸海域を始めベンガル湾や南太平洋など広汎な海域に棲息する種で、成長すると全長120cmに達する。外見は近縁種のエラブウミヘビによく似るが、本種では頭部先端の吻端 板が上下２枚に分かれていないこと、頚部が少しくびれること、環状の横帯模様が明瞭であることなどの形態上の違いがみられる。本種は、日中は海岸の岩の隙間などに潜み、夜になると海に入って魚類を捕食するとされる。繁殖期になると雌が岩場で長径７cmくらいの細長い卵を４～５個産む。また時に大きな群をつくることが知られている。大変おとなしい性格の毒ヘビで、沖縄ではエラブウミヘビと並んで伝統料理の材料として利用されている。写真の標本は、1997年12月に和歌山県串本町田並で生け捕りにされた全長114cm の個体。コブラ科。

I．M.

串本海中公園センター

串本で見られるオカヤドカリ類

宇井 晋介

オカヤドカリはヤドカリ類の中では特異な生態を持ったグループである。その最大の特徴は何と言っても空気中で呼吸できるということで、他のヤドカリ類と違って水が全くない陸上に生息する。オカヤドカリのすみかは海に近い浜から植生のある後背地である。

ところでオカヤドカリというと、子供の時分にお祭りの夜店などで見かけた方も多いと思う。私も沖縄赴任時代に随分と親しんだ生き物で、地元の人は「あまん」と称して釣りの餌として使っており、その親戚であるヤシガニは「ソバつゆのだし」として何度も食べた経験がある。

本来オカヤドカリ類は熱帯起源のもので、日本でも沖縄や奄美諸島、小笠原など暖かい地方でごく普通に見られるが、ここ串本のように黒潮の影響の強い海岸でも数は少ないながら生息が確認されており、図鑑を見ても種によっては本州中部以南とされている種もある。今回たまたまこのオカヤドカリを観察する機会を得たので、報告する。

串本で見られるオカヤドカリ類

今回採集されたのは12個体である。オカヤドカリ類の外見は大変によく似ているのでこれまで分類が混乱しており、今福他（1987）によると、紀伊半島産のオカヤドカリ類についても1986年以前の報告については相当混乱していたようである。それによると、ムラサキオカヤドカリ*Coenobita purpureus*とナキオカヤドカリ*Coenobita rugosus*が多くの場合混同されており、それまでナキオカヤドカリとされていたものの中に、相当数のムラサキオカヤドカリが混じっていたと報告している。さらに紀伊半島ではそれまでナキオカヤドカリのみしか報告されていなかったが、1985年から1987年にかけて紀伊半島西海岸を中心に採集と聞き込み調査を行い111個体の試料を得て、その内訳をムラサキオカヤドカリ102個体に対して、ナキオカヤドカリ9個体としている。

またこれまで両種が混同されてきたのは、どちらの種にも左のハサミ脚の外側に「発音器官」と呼ばれる小さな顆粒があるからであり、そこでこの顆粒があるものが安易に「ナキオカヤドカリ」とされてきたとしている。確かに彼らはこれらの粒々を擦りあわせてキチキチ、キリキリというような音を出すので、観察からまず「ナキオカヤドカリ」という名前が頭に浮かんでもおかしくない。両者の違いは左側第3脚の外側の形状や雄の第5脚の構造、体色などであるが、いずれも外見的に区別するのは専門知識がないと難しい。しかし、今福（同）によると、両種の判別は眼の柄の部分すなわち眼柄と呼ばれる部分の色彩を見ると、よほどの小型個体を除いて区別可能で、ムラサキオカヤドカリでは小型個体は色素帯がなく大型個体でも淡い紫色を呈するのに対し、ナキオカヤドカリでは明瞭な黒い帯があるとされている。

そこで今回採集された個体についてこの方法で同定してみたところ、12個体のうちムラサキオカヤドカリが10個体、ナキオカヤドカリはわずか2個体であった。ここ串本においてもムラサキオカヤドカリがナキオカヤドカリよりも多いようである。



図1．ムラサキオカヤドカリ

生息状況

串本は分布域の上では北限に近く、当然ながらその分布密度は低い。当館周辺にも自然海岸がたくさん残っているが、オカヤドカリを見かけるのは年に数回程度であり、気をつけて探しても滅多に見つかるものではない。しかしながら、子供たちが拾ってきて飼育しているという話は多く、串本周辺でも地域によって生息密度に偏りがあるようである。そこで今回聞き取り

調査を含む踏査調査を行ったところ、町内の海岸のあちこちで生息を確認できた。

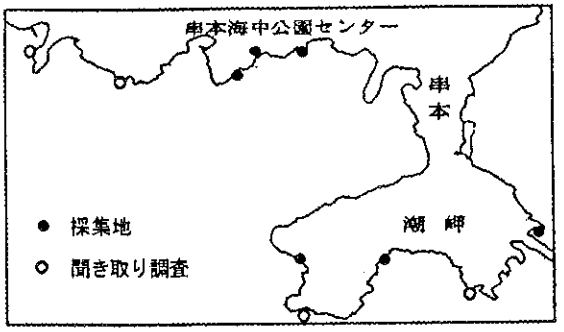


図2. 町内におけるオカヤドカリの分布

ところでオカヤドカリ類は沖縄では真昼にも良く活動していた記憶があるので、真昼にも何度か観察に出かけたが、開けた波打ち際の周辺で得られたものは1個体だけで、他の個体はいずれも草木地帯の中で発見された。この辺りの海岸では多くの場合ほふく性の低木であるハマゴウが海岸を覆っており、大半のオカヤドカリ類もこの茂みの中で見つかった。調査中こうした海岸の植生が切り払われたことがあったが、調べると彼らはことごとく植生の残る場所に移動しており、外敵からの逃避や湿度及び餌の確保という意味からこうした海岸植生に強く依存しているようである。昼間出歩いている個体を見ないのは、単に個体数が少ないからと考えることもできるが、飼育中の観察では朝夕に活発に行動する様子が観察され、また沖縄では夜間



図3. オカヤドカリのすむ海岸後背地

に盛んに活動することが知られているので、当地でも活動はもっぱら朝夕と夜間が中心であるものと思われる。しかし、夜間の調査では、今回は見つけることはできなかった。

オカヤドカリを取り巻く環境

恥ずかしい話で恐縮だが、今回オカヤドカリについて調べることになったのは、私自身の勘違いが原因である。というのは、水槽の展示用としてオカヤドカリを採集したからである。ところが、展示を開始してすぐ、所内からオカヤドカリ類は天然記念物ではという声があり、インターネットの検索で1970年に全種が天然記念物に指定されていることを知った。実はそれまでオカヤドカリの記念物指定は、特定の地域に限られているものと認識していたのだ。以前「錆浦の海から」のコーナーで、洗剤のキャップを背負うオカヤドカリを話題にしたことがあったが、不勉強を恥じるしかない。もちろん彼等には同定後すみやかに元いた場所にお帰り頂いた。

人間は彼等の暮らしに様々な影響を与えているが、直接的な捕獲という意味ではペットとしての採取が一番問題視されている。沖縄県では、天然記念物指定後も大量に捕獲され（文化庁の許可済みであるが）、1975年から同84年までの統計では年平均20トン余り、多い年では50トン以上も出荷されている。また鹿児島県でも年間500キロ余りが出荷されていると聞く。ここ串本における生息量はとても商業ベースに乗るようなものではないが、当地のオカヤドカリ類はその個体数からして地元で再生産しているものとは考えにくく、恐らくは南からの海流に乗ってきた幼生が上陸、成長したものと思われる。幼生の定着には大波の時にも洗われない十分な高さを持った後背地があることと、上陸した小さな子供たちがそこに容易にたどり着ける海浜があることが最低条件となるが、その点で南紀の海岸線は十分な保全がされているとは言い難い。狭い海岸線しかない当地の地形は生活道路を海岸に造るしかないからである。オカヤドカリやアカテガニなど海と陸を行き来する生き物にとっては、はなはだ暮らしにくい環境である事だろう。せめて海岸部の道路を部分的に陸橋にする等の工夫はできないものだろうか。

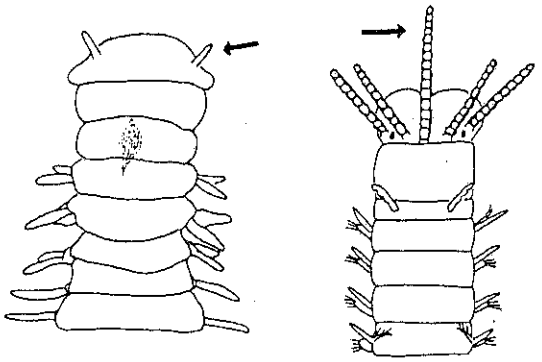
POLYCHAETOLOGICA (6)
多毛類の科の検索　4

内田 紘臣

前回(Vol. 28, p. 28)に続き、多毛類の科の検索表をあげる。

36(35).感触手は左右1対で、中央の不対感触手を欠く.　36'

36.中央感触手をもつ　37

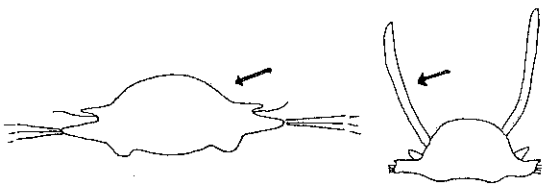


36'(36).背面に鰓はない

コイソメ科 (34)

36'.虫体背面に鰓をもつ

ミノイソメ科　Iphitimidae

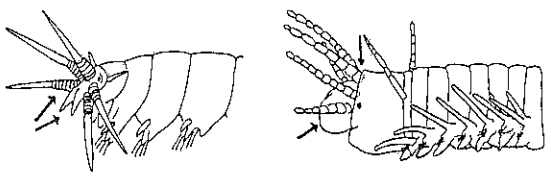


(体節の断面)

37(36).前口葉背面に5本の感触手をもち、さらに通常前口葉前端部に2本の感触手を備える. 前者5本の感触手の基節は首曲がりストロー風に分節する.

ナナテイソメ科　Onuphidae

37.前口葉背面に1～5本の感触手をもち、その基節は分節しない.　38

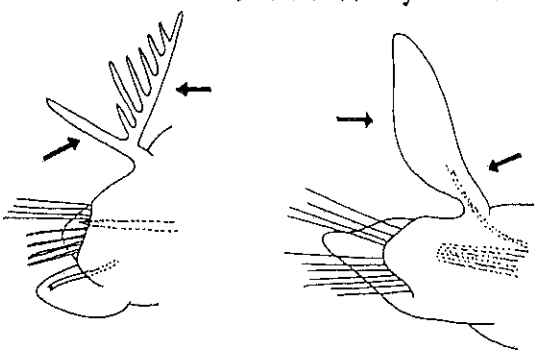


38(37).背触鬚は先細りの円筒状で、鰓をもつ場合、鰓は背触鬚基部付近から派出する.

イソメ科　Eunicidae

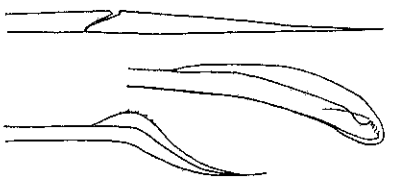
38.背触鬚は扁平で幅広く、その基部付近から鰓を派出することはない.

ビクイソメ科　Lysaretidae



39(35).針状複剛毛(上図)をもち、鉤状剛毛を欠く.　Fam. Hartmaneillidae

39.針状複剛毛を欠くか、それをもつ場合は鉤状剛毛ももつ(下2図).　40

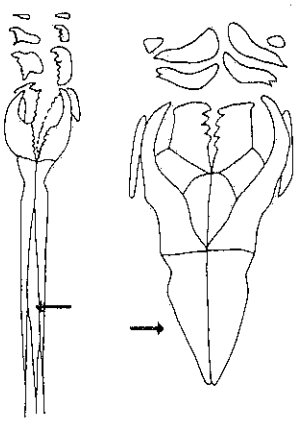


40(39).上顎基部に不対板をもつ. 鉤状剛毛を欠く(図39, 下左図).

セグロイソメ科　Arabellidae

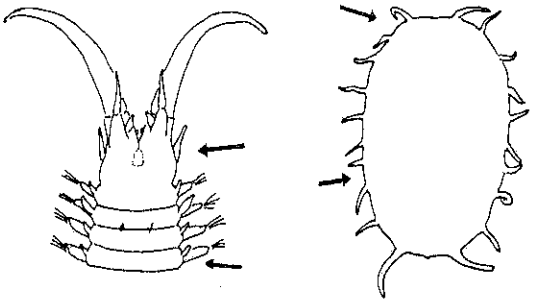
40.上顎基部に不対板を欠く. 大部分のものは鉤状剛毛(図39, 下右図)をもつ.

ギボシイソメ科　Lumbrineridae



41(4).前口葉は体前部の体節と癒合するか、あるいは体前部の体節中に埋没して、認めがたい. 体は蠕虫状で背面から体節性が認 められる. 42

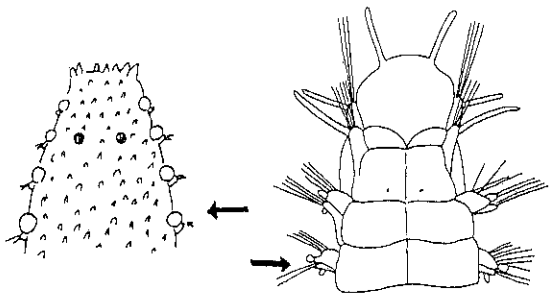
41.前口葉はない. 体は円盤状～長楕円盤状で、扁平. 背面からは体節性が認められない. 46



42(14,41).虫体背面に少なくとも縦2列、通常多くの疣の列をもつ. 背面からの観察では体節性はやや不明瞭.

コブゴカイ科 Sphaerodoridae

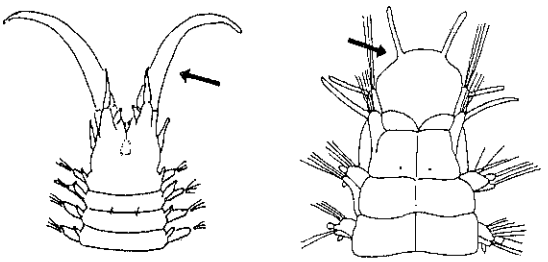
42.虫体背面は平滑. 背面からの観察で体節性は明瞭. 43



43(42).大きな副感触手をもつ.

スナゴカイ科 Pisionidae

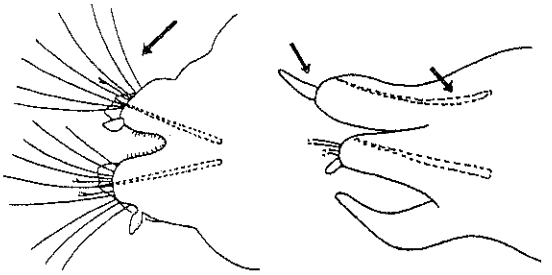
43.大きな副感触手を欠く. 44



44(43).背剛毛をもつ.

シロガネゴカイ科(18)

44.背足刺をもつことはあっても、背剛毛はない. 45

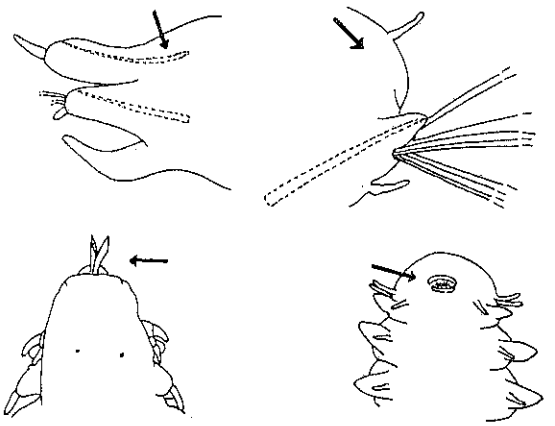


45(44).背足刺をもつ. キチン質の顎をもつ.

Fam. Ichthyotomidae

45.背足刺を欠く. 顎を欠く. 口は吸引型.

Fam. Calamyzidae

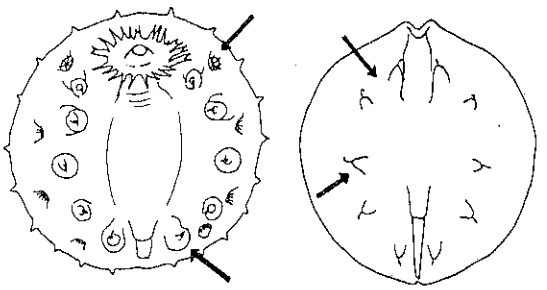


（背面） （腹面）

46(41).5対の疣足と4対の吸盤はよく発達する. 咽頭は翻出可能.

スイクチムシ科 Myzostomidae

46.疣足は退化気味. 吸盤は退化気味か、これを欠く. 47



（腹面）

水族館トピックス－54－
本州初記録のシマウミヘビ

小寺 昌彦

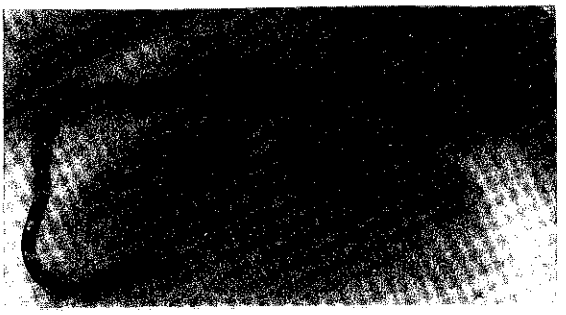
1999年7月5日、潮岬沿岸の水深15mほどの砂礫底でシマウミヘビが串本ダイビングパークのN氏の協力により捕獲された。

シマウミヘビは白地に24～34本の黒帯のある色彩により、他のウミヘビ科魚類と容易に区別できる。また、歯が顆粒状で、胸鰭が極端に小さいという特徴をもち、全長1mほどになる。眼は1本目の黒帯の中にあり目立たない。捕獲された個体は、全長約55cm、吻端と尾端が白く、黒帯は30本で白い地の部分より幅広く、見慣れている他のウミヘビ類のモンガラドオシやゴイシウミヘビなどと比べると非常に細い。

本個体を発見したのは直径3mほどの根のそばで、海底から50cmほどの所を根から離れるようにして泳ぎ、ダイバーのフィンにまとわりつくようにしていたところを捕獲された。普段砂の中にいる本種が泳ぎ回り、人にからんできたことは、非常に珍しい行動と思われる。なお、この周辺には少なくともう1個体、大型の個体が生息していることが以前から知られている。

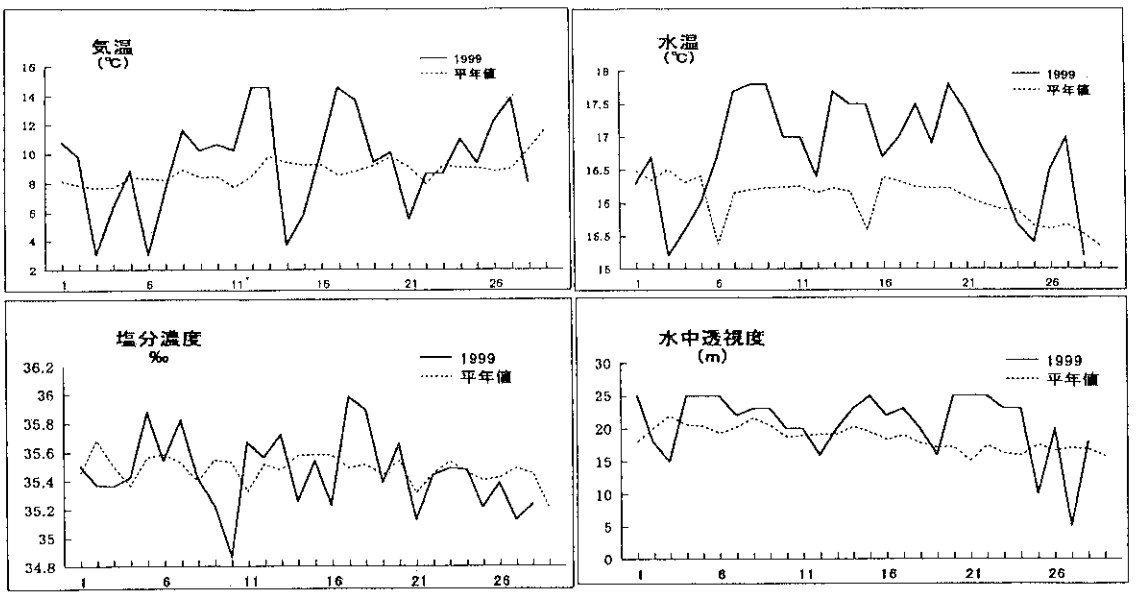
捕獲された個体は7月7日にウミヘビ類の展示水槽で展示に収容したが、水槽に入れてすぐに砂の中に潜り込み、姿を消してしまった。1週間ほどで砂から顔を出すようになったが、頭が小さいため砂上の黒い小石のようにしか見えず、シマウミヘビの特徴的な模様も見ることができないのが残念である。

本種はダイバーの観察例が以前よりあったが、採集されたのは初めてである。また、分布の北限が高知県柏島（平田ほか1996）で、本州初記録になると思われる。

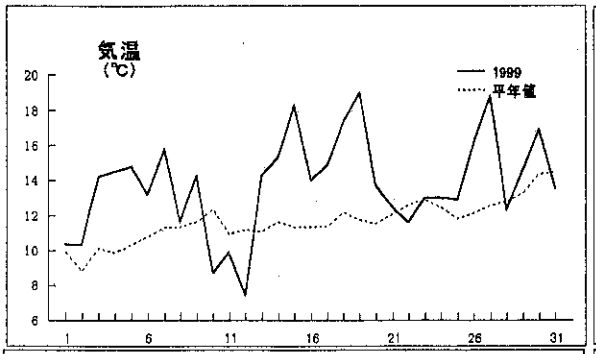


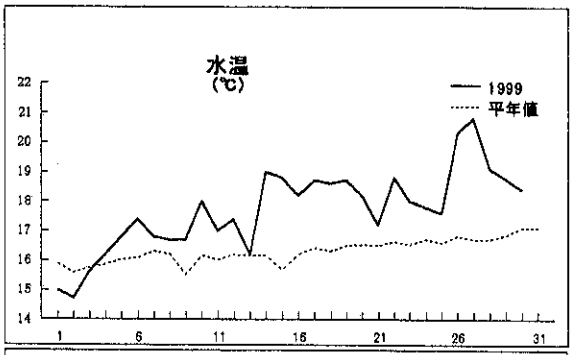
お詫びと訂正　小誌Vol.28,No.3～同.No.5の「錆裏の海から」のコーナーに於きまして、定置観測データのグラフに間違いがありました。ご迷惑をお掛けしましたことを深くお詫びいたします。

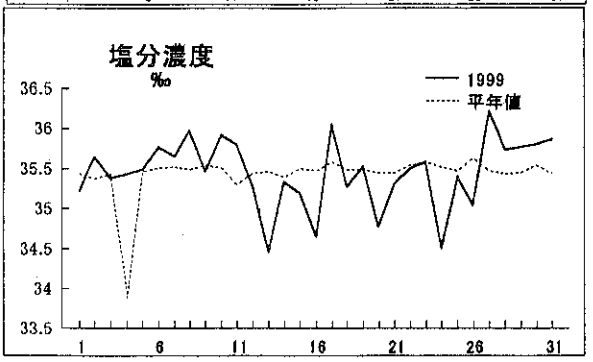
1999年2月　定置観測結果

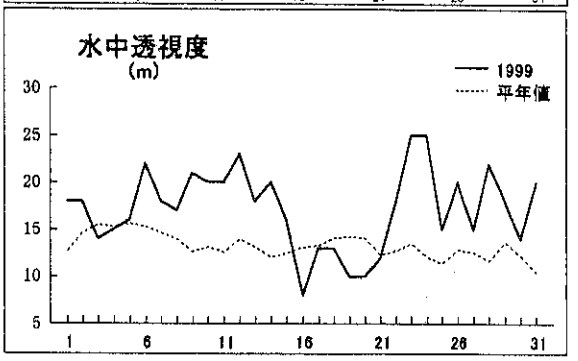


1999年3月　定置観測結果

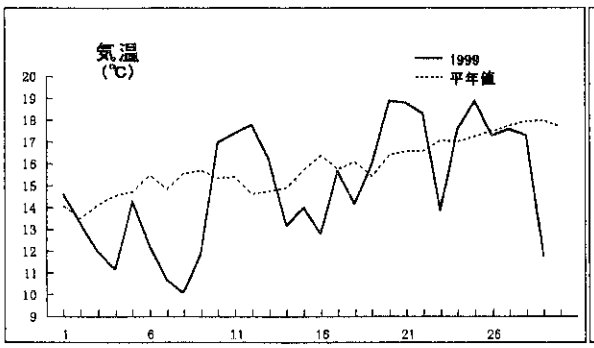


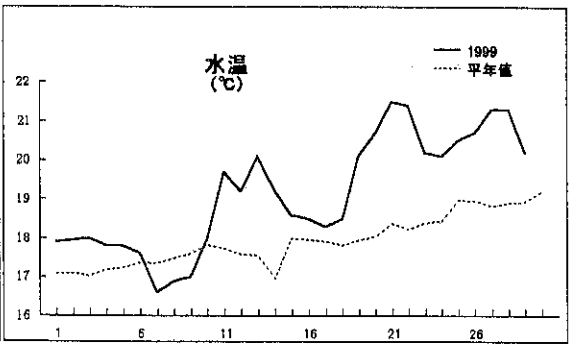


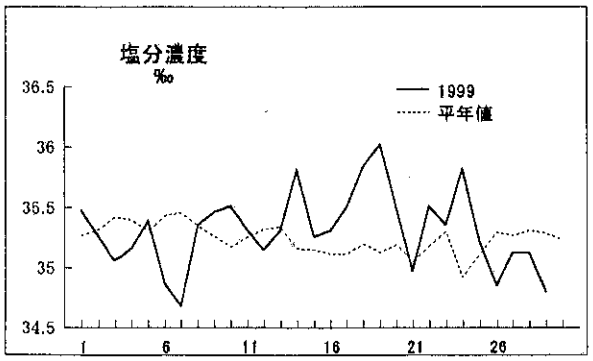


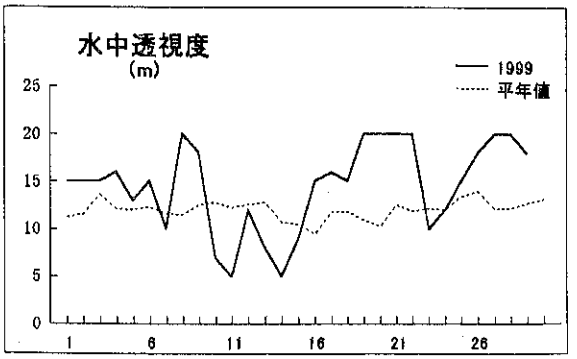


1999年4月　定置観測結果







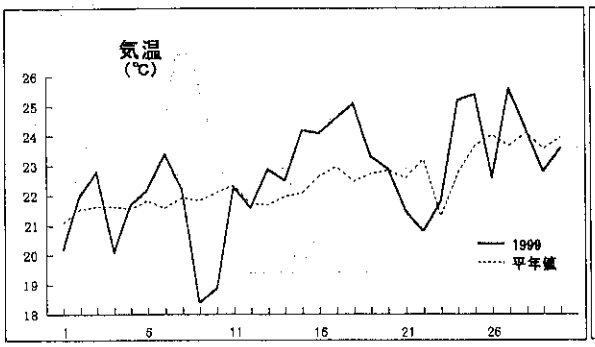


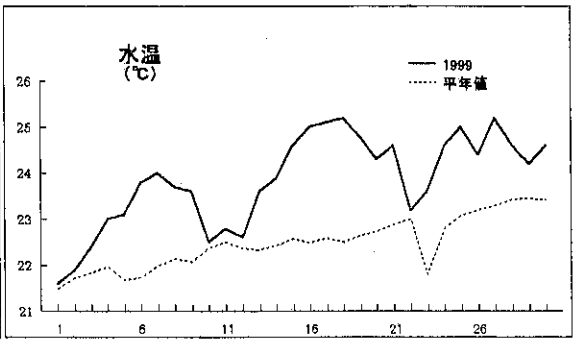
錆浦の海から

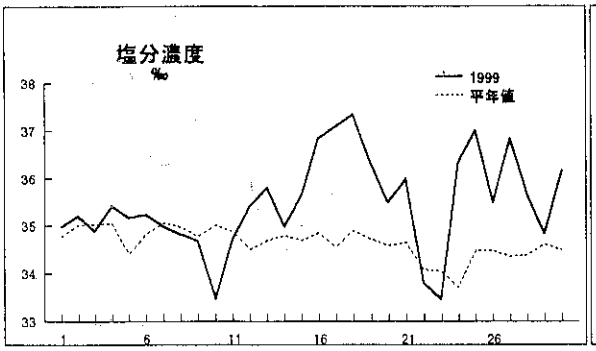
宇井晋介

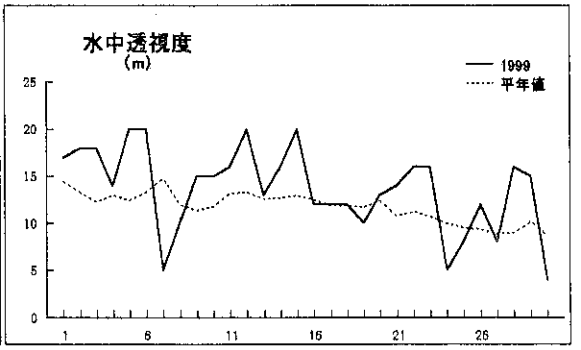
6月平均値	気温　22.6 ℃	水温 23.8 ℃	塩分　35.40 ‰
	透視度 13.7 m	月間降水量　286.3 mm	

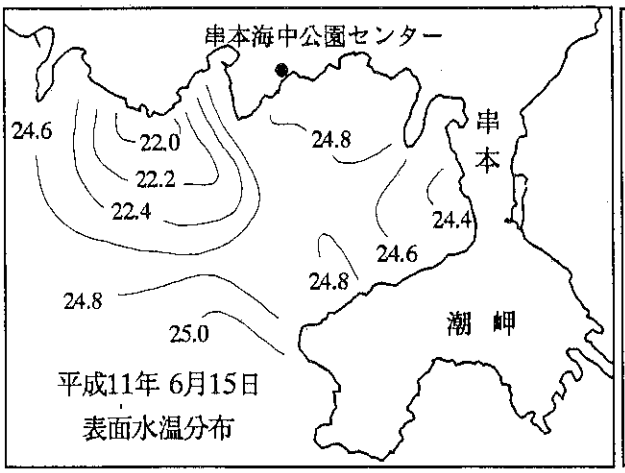
オカヤドカリを探して海岸をずいぶんと歩いた。道路からあるいは海から見る海岸と違って、自分の足で歩くとまた違う風景が見えてくる。例えばこんな人里離れた寂しげな浜辺でも、時代の変化を肌で感じることができる。高度成長時代には浜は大小のオイルボールで埋まった。経済成長とともに石油タンカーが続々と建造された時代だ。同時に何でも海に捨てていた時代。しかし海洋投棄に対して監視の目が年々厳しくなり、オイルボールはずいぶんと減った。今一番目につくのは中国語や英語の表示のある洗剤や飲料水の容器、東南アジア製の漁具など。一見してアジア諸国からのものだ。アジア世界の急激な台頭とそこに住む人々の増加、物質的な豊かさを、浜に打ち上げられたゴミは雄弁に語る。カニたちが今日のねぐらを探してゴミの山にそそくさと潜り込む。Made in CHINAの家にMade in MALAYSIAのカーペット。奇しくも近くにすむ人間どもと同じではないか。











マリンパビリオン Vol. 28, No. 7 通巻 331号
1部 50円（年間購読料 1,500円 送料含む）
印刷日　平成 11 年 7 月 20 日
発行日　平成 11 年 7 月 25 日
口座番号：00990-9-41351
口座名称：串本海中公園マリンパビリオン
編集兼発行人
〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
（株）串本海中公園センター
電話　0735（62）4875
FAX　0735（62）7170
印刷所
坂本印刷
串本町串本2481　Tel: 0735（62）0895